

# 劣等意識における感情処理についての一考察

依光玉恵

## 一、はじめに

### 「顔の形」

四年 T・I

ぼくの顔は長くて細い。長細で、まるで野菜のナスのようです。でも、みんなから「キュウリ」「キュウリ」といわれます。仕方がありません。長いんだから。長細い顔じゃなくて、丸い顔だったらいいのになあ。

お母さんに言ったら「赤ちゃんのときは顔もまんまるで、手もまんまるで、何でも今は細いのかなあ、不思議だねえ。」といいます。ほんとに赤ちゃんのまま顔が丸かったらいいのと思います。

顔の長さでおもしろいこともあります。ぼくの背の順の前は関ちゃんです。その前が河合君です。ぼくは肩の高さは関ちゃんにも河合君にも負けています。でも、顔の長さで背の順は今

は勝っています。

め、早くひっこめ。」と言います。そう言って頭を押します。

ぼくは背の順が下がっていいから、顔が丸くなってほしい。丸くなってほしいなあ。

### 「ほくろがいっぱいのぼく」

四年 W・O

ぼくの体にはほくろがいっぱいあります。どうして体にはほくろがいっぱいあるんだろうと不思議に思うくらいです。

左うでには11こ、右うでには少なくとも6こ、左足には12こ、右足には11こ、合計55こ以上あります。せいぜい13こ位がいいと思う。

取ってもらいたい所は鼻の下のほくろです。見られるとやな気がします。だ

けど、取れません。だけど、お母さんは「ほくろは涉のチャームポイントだよ。」と言ってくれます。

生まれた時にはついていないのに、

成長するにつれてほくろが増えていきます。そして、そのことでよくからかわれます。「ホクロマン」とか「鼻くそがついているぞ。」とか言われます。

からかうというか、悪口みたいでやです。どうしてぼくの体にはほくろが55こ以上あるんだろう。ほくろなんかやだなー。

だけど、役に立つこともあります。

もし、ぼくが中国残留こ児だったら、すぐに分かるということです。やっぱりほくろがついていてもいいや。

### 「かみの毛のこと」

四年 Y・A

私はどうしてかみの毛のことで悪口を言われるのかな。「キノコ頭」とか「マッシュルーム・カット」とかって。私だって好きでこういう頭をしているんじゃないのに。

かみを伸ばしても、短く切っても「あ、もつと頭がキノコっぽくなった。」

って、みんなでからかうんだもん。いやになっちゃう。

それに、むこうはじょう談のつもりでも私には悪口になって耳に入ってくる。もう、ムカッとして、いつもいつも追いかけてやう。でも、その度にげられて、くやしうてしょうがない。

特にひどかったのは、一二年の時同じクラスだった鈴木……えーっと勝義とかいってたっけな。毎日休み時間に最低五回は「キノコノ マッシュルーム・カットノ」っていうの。だから、いつも「何だよ。この鈴木カツオブシやろうノ」って決まって言い返してやるんだった。

だって、ずうっと言われっぱなしっていうのは、やっぱりいやでしょう。言い返してやれば、気分がスカッと

するの。休み時間が追いかけてただけで終わっちゃったことがよくあったっけね。その時「あーっ(チャイムが)鳴っちゃったあ。あんたが何だかんだ言うか

らだよー。」「てめえが追っかけてくっからだろっ。」って言い合っているうちに先生におかれちゃったりして。

それで、今でも頭のことで言われるんだよね、時々。今は言い返す時「あたし人間でっす。」と言ってやるんだ。そしたら行っちゃうから。

ここに掲げた作文は「生いきの生態を探る」という合同研究の過程の中で、子どもの劣等意識と生いきとの関わりをより具体的に探るために書かせたものの中から代表例として選んだものである。

合同調査では、劣等意識が自分の身体の中の部分にいき易いかということも調査したので、その調査との関連から「自分の身体の中でいやだなと思うこと」について書かせた。

ただ、これらの作文は劣等意識を抑さぶるものだけに強制的に書かせることは控え、書いてもいいという子に提出させた。それだけに、作文を書いたくれた子というのはコンプレックスから立ち直れていない子ではなく、自分の心の中である程度の解決ができているものと考えられる。

こうして得られた作文は劣等意識を持つ子どもの感情処理の仕方を考えてみる上で大変興味深い作文でもあったので、ここでは劣等意識における感情処理に焦点をあてて考察を試みたい。なおその前に、これらの作文を書い

た三人の子どもについて簡単に紹介しておきたい。

「顔の形」を書いたT・Iは真面目で勉強はできるが、一見ひ弱な感じのするタイプの男の子である。気弱そうに見えながら、芯が強く頑固な一面も持ち合わせている。T・Iを特徴づけているものの一つに顔の形がある。本人も自覚しているように、顔が目立って細長いのである。

「ほくろがいつぱいのほく」を書いたW・Oはクラスの中では恐いものなしの腕白坊主である。相当の自信家でもあり、人の気にしていることを平気で指摘したりもする。けれど、そんなW・Oにも弱点がある。ほくろである。ことに鼻の下にある大きなほくろのことをいわれると辛い。日頃の腕白ぶりほどこへやら、塩をかけられたナメクジのように元気がなくなってしまう。しかし、それも根が陽気で天真爛漫なW・Oのこと、塩をかけられたナメクジでいるのはほんの一時である。

また、「かみの毛のこと」を書いたY・Aは同級生が感情に振り回されている様子などを一歩退いて冷めた目で眺めることもある反面、感情表現の豊かな作文を書くことのできる女の子でもある。言語能力が突出していることが生いきな子の特質の一つであるとするとならば、Y・Aは明らかに生いきな子であるといえる。また、なかなかの博識家なのでクラスの中では一目置か

れている。

## 二、考察

子どもたちの書いた「自分の身体の中でいやだと思うこと」の作文中からよく使われている言葉や文、あるいは同波長のものを取り出して分析することにより、劣等意識を持つ子どもたちがどのように自分の感情を処理しようとしているのかを考えてみたい。

《願望とくどきを表わす「——のに」》  
これらの作文中、最もよく出てくるのは、「——のに」という言葉である。例えば次の通りである。

●長細い顔じゃなくて、丸い顔だったらしいのになあ。

●ほんとに赤ちゃんのまま顔が丸かったらいいのにと思います。

●生まれた時にはついていないのに、成長するにつれてほくろが増えています。

●私だって好きでこういう頭をしているんじゃないのに。

●友だちははつきりとあいた目をしてるのに、どうして私はこんな細い目をしているのだ。

●事故にあわなければこんなことにならなかったのに。

これらの文例からよくわかるように、「——のに」という言葉は、単に願望を表わすだけでなく、くどきを表わす言葉としても使われている。すなわ

ち、願望と現実との違いに気づき、願望に対する未練を残しながらくどく感情をすでに上どもたちは覚えているのである。しかしその一方で、この言葉は子どもたちにとって「現実はどうだけれども、もしこうでなかったら、本当はこうなっていたのに」というくどきめにもなっているといえる。

《諦めを表わす「仕方がない」》

「——のに」とくどいた子どもたちも、そのくどきを解決する仕方を見つけることができたなら、そこで悩みも解決できる。すなわち劣等意識もそこで捨て去ることができるのである。しかし、その解決の仕方（方法）が見つけれないと、やがて「仕方がない」という諦めの感情を表わす言葉を覚えるようになる。

「そんなことを言っても——するわけではない」や「——としか言いようがないから」という言葉を使った時にも、「仕方がない」という諦めの感情が含まれているといえる。運命に対する諦めであり、現実を現実として肯定して自分を納得させようとする感情である。これらの文例をいくつか取り出してみると、次の通りである。

●でも、みんなからは「キウウリ」「キウウリ」といわれます。仕方がありません。長いんだから。

●きれいな目がほしい。でも、そんなことを言ってもきれいな目がわたし

の目にくるわけでもないし。こまっ  
た目。

●でも小さいのは小さいとしか言いよ  
うがありませんから、とつてもくや  
しいです。お母さんに顔も似ました  
が、背の低いのも似てしまったので  
す。

《どうすることもできない無念さを表  
わす「好きで——じゃない」》

「仕方がない」と諦め、現実を現実と  
して肯定して自分を納得させようとし  
ている間は、その現実是谁のせいでも  
ない。

しかし、その現実をあまりにも頻繁  
に他の子から指摘されると、一体なぜ  
自分はこんなにもいやな思いをしなけ  
ればならないのかという感情が湧き上  
ってくる。自分のせいでこのような結  
果（現実）を招いたのであれば、どん  
なに指摘されてもがまんをしよう。ま  
た、自分の意志でこの現実を変えるこ  
とができるものならば努力もしよう。  
だけど、自分のせいではなく、また自  
分の意志ではどうしようもないんだと  
叫びたい思いが「好きで——じゃな  
い」という言葉を見つけてくる。自分  
のせいではないのに、現実に対してど  
うすることもできない無念さが言わせ  
る言葉なのではないだろうか。

この文例はあまり多くはないが、二  
例ばかり取り出してみると、次の通り  
である。

●私だって好きでこういう頭をしてい  
るんじゃないのに。

●ぼくは好きで背が低くなったのでは  
ない。

劣等意識における感情処理は、すな  
わち対人関係における感情処理でもあ  
る。自分の欠点にのみ目を向け、いつ  
までもそこに劣等意識を止めているわ  
けではない。

これらの作文を読んでいると、対人  
関係意の中で子どもたちが劣等意識か  
ら自分を解放するための糸口を無意識  
のうちに探し求めようとしていること  
を感じる。

すなわち、他者との「競争意識」、  
他者への「言い返し」、そして「母親  
の言葉」との関わり中で、子どもたち  
は自分なりに精一杯、やや持て余し気  
味とも思える劣等意識を処理しようと  
しているのである。

《劣等意識にも競争意識は働らく》  
競争意識が表われている文例を取り  
出してみると、次の通りである。

●ぼくは肩の高さは関ちゃんにも河合  
君にも負けています。でも、顔の長  
さで背の順は今勝っています。

●妹にあと十センチぐらいで追いつか  
れてしまいます。だから、もっと背  
がのびないかなと気にしています。

●中学生や高校生ぐらいに、お母さん  
の身長をぬかしたいです。

最初の文例では「顔の長さ」を自分  
の悩みとして取り上げておきながら、  
それを逆手にとって「でも、顔の長さ  
で背の順は今勝っています。」と競争  
意識をのぞかせている。競争意識を  
働かせることによって「顔が長い」と  
いう悩みが解決できたのかというと、  
そうでもない。しかし、自分の劣等意  
識に対する感情が未だにうまく処理で  
きずにいながらも、かなり冷静に自分  
の劣等意識を見つめようとしていると  
いえる。

また、あとの二例は身長が悩みとな  
っている子の文であるが、競争意識を  
働かせることによって、ささやかな  
期待感を抱こうとしているといえる。

《「言い返し」は精一杯の防備の姿勢》  
子どもというものは人の粗を平気で  
暴きたてたがる残酷さを持っているも  
のである。人が気にしている欠点を容  
赦なく指摘する。

指摘された方は、はじめのうちは悔  
しい思いをしながらも暫くはそれに耐  
えている。しかし、いつまでもただひ  
たすらに耐えているわけではない。自  
分が受け身でいられる限界というもの  
を子どもは感覚的に知っているのだら  
う。

この感覚が鋭い子どもは、欠点を容

赦なく指摘してくる相手に反発し、た  
とえ負け惜しみであっても言い返すこ  
とによって自分の感情をうまく処理す  
ることができる。

しかし、ここでの感情処理がうまく  
できなかった子どもは、劣等意識をさ  
らに内攻させることになるので、気  
をつけて見守ってやる必要があると思  
う。

この文例をいくつか取り出してみ  
ると、次の通りである。

●だって、ずうっと言われればなしっ  
ていうのはやっぱいいやでしょ。言  
い返してやれば気分がスカッとする  
の。

●今は言い返すとき「あたし人間で  
っす。」やって言ってるんだ。そし  
たら行っちゃうから。

●わたしは自分のおでこが好きではあ  
りません。なぜなら「とう台」とい  
つもクラスの男の子に言われているか  
らです。わたしはそのたびに「そう  
なの。わたし東大に入ったの。」と言  
い返すけど、やっぱり気になります。  
●ぼくの顔はアメリカ人みたいってみ  
んなに言われる。ぼくはこのことを  
言われると本当にくやしくなる。言  
い返す言葉がなくなるくらいくやし  
い。

《微妙に影響を与える母親の一言》  
先にこれらの作文中、最もよく出て

くるのは「――のに」という言葉であるということ述べたが、それと同じ位多かったのが母親の言葉である。それらの中からいくつかを取り出してみると、次の通りである。

●「ただ、お母さんは「ほくろは渉のチャームポイントだよ。」と言ってくれます。」

●お母さんに言ったら「赤ちゃんのときは顔もまんまるで、手もまんまるで、体もまんまるで、なんで今は細いのかなあ。不思議だねえ。」と言います。

●お母さんは「一重でも別に悪い目でもないのよ。目が見えなくてこまっている人もいるのよ。それに一重の方が日本人らしくていいのよ。」と言いました。

●お母さんは「生まれつきだからしょうがない。」と言いますが、気になります。

●お母さんは「好きで病氣しているんじゃないんだからしょうがないですよ。」なんて言うんです。

このように、劣等意識についての作文には母親の意見が入ることが多いが、その際の母親の一言が劣等意識を持つ子どもの感情処理に微妙な影響を与えることがわかる。

最初の文例の母親は、とれるものならば手術をしてまでもとりたいと願っ

ていたほくろを「チャームポイントだよ。」と言ってやることによって、最後に「やっぱりほくろがついていてもいいや。」という言葉を引き出している。

また、二番目の母親は、「不思議だねえ。」と言ってやることによって、自分のせいにしないだけでなく、センチメンタルな方向に感情を処理しないようにさせている。

さらに、三番目の母親は、「一重がいかにすぐれているか」ということを言っていることによって、「わたしはやっぱり細目の方がいいと思った」と言わせている。

このように、子ども達は母親の一言によって救われている。これらの三人の母親たちは対応の仕方が上手だといえる。

しかし、後の二例の母親たちは「しょうがない」という言葉で対応している。

確かに、生まれつきだから「しょうがない」し、何も自分から好きで病氣になったわけじゃないのだから「しょうがない」のは事実である。しかし、悩んでも「しょうがない」ことで子ども達が悩み、何とかその悩みを解決する「しょう（仕様）」「仕方」を求めていることも事実である。

悩んでも「しょうがない」ことを「しょうがない」と言うことは簡単である。しかし、悩んでいる子ども達に

とって必要なのは「しょうがない」の一言ではない筈である。

悩んでいる自分の感情を自分自身で納得できるように処理するための助言、すなわち、「しょう（仕様）」を見つけるための一言こそ必要なのではないだろうか。

このように見てくると、劣等意識を持つ子どもにとって、母親の対応の仕方がいかに重要であるかということがよくわかる。

### 三、おわりに

子ども達の劣等意識に関する作文を読んでいると感じたことをいくつか述べてみたい。

第一に、教師が子ども達の悩みを果してどれだけ知っているかということである。

私自身「この子がこんなことで悩んでいたなんて」と思うことが多々あり、改めて自分が一人ひとりの子どもをあまりよく見つけていないことを思い知らされた。

ここに掲げた作文に暗さは感じられないが、それはすでに述べたように、自分の心の中である程度の解決がなされているからだと思われる。しかし、コンプレックスから立ち直れないまま、誰にも言えないようなところで悩み苦労している子どももだっている筈である。そのような子ども達の悩みさえも、「先生だけはわかってるからね」

と見守ってやれるだけの力量が教師にとっていかに必要であるかを感ずる。

第二に、劣等意識における感情処理の中で「仕方がない」あるいは「しょうがない」という言葉がしばしば使われることである。

これらの言葉は、解決の仕方あるいは仕方が見つけられない時の諦めを表わすのではないかということはすでに述べた通りである。

小学生の段階で、これらの諦めの言葉をしばしば使わせるのは果していいことであろうか。もちろんいい筈はない。

現実を変えることはできないが、子ども達の意識は変えられる筈である。

子ども達に安易に「仕方がない」あるいは「しょうがない」という言葉をつぶやかせないためにも、教師には解決の仕方あるいは仕様を見つけるためのきっかけをつくってやる役目があるのではないだろうか。

第三に、劣等意識を持つ子どもにとって、母親の一言が微妙に影響を与えるということである。

正直言って、子ども達がこんなにも多く作文の中に母親の言葉を書くとは思ってもみなかった。母親が何気なく言ったかも知れない一言で、子ども達はさらに悩みもすれば救われもするのである。ぜひとも、子どもへの対応には細やかな心配りを願いたいものである。

（座間・中原小教諭）